



Hole / 桃源郷 / 境界 / 絵画 / 眼底
Hole/Paradise/Border/Painting/Fundus of the Eye

アクリルミラー、木
Acrylic mirror, wood
直径 197.4cm の円、ほか数点
One circular piece 197.4 cm in diameter, several other pieces

船井は、日本の伝統的な造形感覚を取り込みながら、独自の絵画世界を探究しつづけてきた描き手である。明治期以降、西洋とのかかわりの過程で幾重にもねじれた日本絵画の歴史を批判的にとらえ返し、線と面による簡素な、しかし豊穡な有機性を持つ二次元的表現に、新たな可能性を見いだしている。それは、近代化以前の絵画の有していた特性に現代性を融合させたものと言える。

鏡を素材とした今回の出品作は、タブロー主体の平面表現の中で一見すると、異趣な彫刻的形態に思われるかもしれない。だが、その成り立ちと意図を読み取れるならば、明確な絵画性に基づいていることが分かるのではないか。基になっているのは、画家が下図なしで直観的に制作した大型のドローイングである。奥行きをもって描かれた画面上の線や形は、制作の際の作者の身体的な動きを映し出すように呼応し合い、森羅万象が連関しながら展開していったことが、作品から伝わってくる。

テーマは「楽園」だという。現実には誰も見たことがないが、誰もが知る究極の風景画としての桃源郷。それは暗鬱な時代にあっても人々を支えてきたイメージである。同時に、その虚像性は絵画の本質にも重なってくる。切り絵のように展示壁に据えられた作品は、鏡面に映る観客や会場の空間、壁面などを内部に引き入れ、現実と非現実が複雑に往還する場を生み出すだろう。そこは、見る者をさまざまな思索へと誘う場となっていくに違いない。

平本邦雄(共同通信社文化部記者)

